

## 岩をくだいて水を通した山之内仰西

山之内仰西（本名は<sup>みつぎね</sup>光実）は、江戸時代の始めの1614年、現在の久万高原町の旧久万町村の山田屋に生まれました。

山田屋は、<sup>しょうぎやう</sup>商業を<sup>いとな</sup>営み、<sup>さけつく</sup>酒造り、<sup>しちや</sup>油しぼり、質屋もしていました。



光実<sup>しんよう</sup>は商業をしていく上で、最も大切なことは、信用であると考え、そのため、人にやさしく、自分にきびしくすることに努めました。そのような努力が実り、山田屋はますますはんじょうするだけでなく、人々は、困ったことがあると、光実<sup>そうだん</sup>に相談するようようになりました。

光実<sup>しよくにん</sup>は、小さいころより、いろいろな物を作ったり、よい品物をつくるため工夫することに熱心に取り組みました。一番好きだったのが、石がき積みや道づくりなどの土木工事でした。せんもんの職人の仕事をじっくり見つめ、<sup>しつもん</sup>質問したりして、仕事のこつを<sup>おぼ</sup>覚えていきました。そのため、大きな工事があると、光実がみんなを<sup>さしず</sup>指図して工事をすすめるようになりました。

また、光実<sup>ほうねん</sup>は、少年のころより、父に連れられて、<sup>し</sup>法然寺や<sup>だいほう</sup>大宝寺にたびたび<sup>まい</sup>お参りし、りっぱな坊さんの話を聞きました。そして、「人間は、生きている時の行いによって、死んでから行くところが決まります。よい行いをした人は天国へ、悪い行いをした人は地ごくへ行かなければなりません。」のような仏さんの教を深く信じるようになりました。

そのような理由から、年とってから、自分の名前を「仰西」と呼ぶようになりました。

光実が50才を超えたある年、はげしい雨風により、久万川をせき止めていたせきが落ち、田んぼへ水を引く「かけひ」も流されてしまいました。「かけひ」というのは、田んぼに水を引くために木をくりぬいた「とい」のことです。これらのせきや、「かけひ」を<sup>もとどう</sup>元通りにするには、近くの村の力を借りなければならないような大工事なのです。

そのため、久万町村や入野村の田んぼに水がこなくなりました。水がないと米を作ることはできません。

江戸時代の<sup>ひやくしやう</sup>百姓は、みんな苦しい生活をしていました。一年中なんぎして働き、作った米や麦などの作物の五わりから七わりを税金としておさめなければなりません。その米がとれなくなると、税金をおさめるどころか、自分たちの食べるものさえなくなってしまう。

百姓たちは、自分たちの食べる分を税金としておさめ、あとは、とうもろこしやひえやつる草のいもなどを食べて命をつないでいました。

光実は、毎日、久万川の岩場に立ち、川をながめ、なんとか水を引くやり方がないか、考えつづけました。



《岩をくだいて、できた水路》

そして、決心しました。ある夜、妻のヤスと息子の義秀よしひでをよび、「久万川からどうしても水を引かねばならない。そのためには、あの固い大きな岩を掘らねばならん。石のみの力があればきっと通せるにちがいない。人々はなかなか分かってくれまい。差し当たって、一人で始めてみようと思う。おまえらにはなんぎをかけるが、義秀も、もう一人前じゃ。母親と力を合わせて、山田屋を守ってくれ。」光実は、二人の前に手をつき、深々と頭を

下げました。

やがて、数人の石工いしくが光実の引いた線に沿って、げんのうをふるい、石のみをたたきはじめました。その石工たちも光実がお金をだしてやとった人たちです。光実と数人の石工の力では、何日たっても仕事ははかどりません。大勢の人の力をかりなければ、あの大きな岩を掘りぬくことはいつまでたってもできません。光実とほうは途方にくれました。

そこで、光実しょうやは、庄屋をはじめ、村役の人たち、久万川から水を引いている百姓たちの家を回り、力をかしてくれるようにたのみました。みんなは、光実のきもちはわかってくれました。しかし、げんのうと石のみだけでトンネルを掘るという計画を知ると、うまくいくわけがないと力をかそうとはしませんでした。

困り果てた光実ひっしは、大きな岩かべの前にすわりました。そして、一心に祈り始めました。「なみあみだぶつ、なみあみだぶつ、どうか、光実の願いを聞いてください。みんなの力を借りるにはどうすればいいのでしょうか。どうか教えてください。なみあみだぶつ。」目を閉じた光実ほとけさまは長い間、必死になって祈りました。すると、突然、目の前が明るくなり、金色のまばゆい光が広がりました。そこには、あみだ様（えらい仏様）が立っていたのです。そして、一言、「光実、捨てることです」とおっしゃいました。

光実ごいさんは、「なにを、捨てるのか」考えぬきました。

そして、ある日、妻のヤスと息子の義秀にいいました。「捨てることの意味は、わしの持っているすべての財産ごいさんを捨てることである。」「そのお金で、みんなに協力してもらおう。みんなに岩を掘ってもらおう。そのとき、岩がかけるだけでなく岩の粉こなもおちる。

その石の粉をますではかり、一升（1.8 リットル）あれば、それと引きかえに、米一升を渡すのだ。」

自分の財産を捨てても工事をやりとげようとする光実の強い信念に心うたれ、百姓たちは、次々と工事に加わってきました。毎日、仕事が終わると石の粉と引きかえに米をもらって帰りました。工事は休みなくつづけられました。光実自身、雨の日も、風の日も、雪の日も、一日も欠かさず、のみをふるい続けました。仕事がすすむにつれて、山田屋の財産もへっていきました。

一年がたち、二年がたちました。このころになると、百姓たちは、米をもらう<sup>もくてき</sup>目的で工を手伝うのは、光実にととてもすまない気持ちをもつようになりました。なぜなら、これらの仕事は、自分たちのための仕事でもあるからです。これからは、米はもらわないようにすることが、相談で決まりました。

光実は、たいへん感げきしました。そのとき、久万一番といわれた山田屋の財産も、もう残り少なくなっていました。

掘り初めて三年がたったある日、トンネルの中の岩をたたく音が変わりました。もうすぐトンネルがぬけるのです。光実が中に入り、岩を思い切りたたくと、岩のさけ目から、パット明るい光がさしてきました。石工や百姓たちは、大きな声をあげ、抱き合い、涙を出して、喜び合いました。



《岩をくぐって、できたトンネル》

光実、まるで力がぬけたようにすわりこむと、手を合わせ、「なみあみだぶつ」「なみあみだぶつ」ととなえつづけました。

それから、しばらくして工事も終わり、久万川からの水が、流れ始めました。幅 1.2 メートル長さ 57 メートルと固い岩をくりぬいた新しい用水路ができあがったのです。途中には高さ 1.5 メートル、長さ 12 メートルのトンネルが掘られています。そして、その水が 25 ヘクタールの田んぼをうるおすのです。その後、今日まで水の心配なしに米を作ることができるようになったのです。

平成 18 年 8 月のある日、仰西がつくった用水路を訪ねました。330 年余りたっているのに、この用水路は、当時の工事そのままの姿を残し、きれいな水がとうとうと流れていました。そして、その周辺の道や土手<sup>どて</sup>さらに記念碑のある小高い丘<sup>きねんび</sup>は掃除が行き届き、美しく整備されていました。仰西翁奉讃会<sup>こうせいおうほうさんかい</sup>や地元の人たちの、仰西に対するあつい感謝の思いが、ひしひしと伝わってきました。

山之内仰西に関する史跡等

- 1 明治10年 藤野正啓氏筆の「仰西渠之碑」 取水トンネルのすぐ上の丘
- 2 明治31年 二百回忌を記念しての「山之内仰西翁墓」 法然寺境内
- 3 昭和25年 「史蹟名勝天然記念物に指定」 愛媛県教育委員会
- 4 昭和43年 二百七十回忌を記念して「山之内仰西翁頌徳碑」 久万中学校前

○ お世話になった方 元久万小学校長 石丸 常

○ 参考にさせていただいた本

「愛媛子どものための伝記 第三巻 山之内仰西」 神野昭著 愛媛県教育会  
「仰西」 山之内仰西翁三百年忌 記念事業推進委員会  
「ふるさと明神」 久万町立明神小学校